

---

# エミヤ i n G S

hisuison

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

エミヤिंगス

### 【Nコード】

N9116M

### 【作者名】

hissuison

### 【あらすじ】

理想の破れたエミヤの前に現れた懐かしの旧友すっかりで女の子にされたうえ異世界に飛ばされるはめに、目が覚めると非常識だらけの世界に・・・

横島とエミヤの考えの違いや方法でブチ当たっていく幸せのための物語

## プロローグ（前書き）

シロウトSですので、嫌だと言う人はこのまま回れ右をして下さい。

設定も一部作者のいじくりが入ってます

## ブローグ

体は剣で出来ている。(I am bone of my sword.)

血潮は鉄で 心は硝子。(Steel is my body, and fire is my blood.)

幾たびの戦場を越えて不敗。(I have created over a thousand blades.)

ただの一度も敗走はなく、(Unknown to Death.)

ただの一度も理解されない。(Nor known to life.)

彼の者は常に独り 剣の丘で勝利に酔う。(Have withstood pain to create many weapons.)

故に、生涯に意味はなく。(Yet, those hands will never hold anything.)

その体は、きつと剣で出来ていた。(So as I pray, unlimited blade works.)

ある男は自身の信念を貫き英雄へ

ある時は、金色の悪魔の執事をして・・・

ある時は、赤い悪魔の実験台に・・・

またある時は、ある屋敷のメイドにおちよくられながら・・・

己の理想を信じ、じわりじわりと壊れながら歪んだ結晶となっていた。

完成した結晶は儚く、信念もついには摩耗し、抱き続けた理想に絶望して、かつての生き方を憎む。

しかし、過去への復習劇は赤い悪魔の前に消え去ることになる。

side ????

変わり果てた街は荒地になり、瓦礫のあちこちから煙が上がっている。

立っている者は2人、もうずく190に届きそうな長身の白髪の男・黒髪ロングヘアーの女だけだった。

「ひさしぶりだな遠坂」

今、エミヤの前には聖杯戦争当時より10年経ってより美しく成長したロングヘアーの女性がいた。

「お久しぶりね士郎・・・いえアーチャーと言った方がいいかしら。結局あいつと同じ道を進もうとしてるわけね。赤い外套まで着てしまつて姿までそっくりね」

遠坂は悲しみや怒りが交じり合った瞳をしながら士郎に皮肉に語り

かける、事実エミヤの姿は聖杯時代に召還されたアーチャーに瓜二つだが。

「確かに私は奴にそっくりだろう、だが今でこそわかることがある。奴の言っていた意味がそして、やろうとしていた事が・・・私が・・・いや衛宮士郎が存在すること自体が全ての間違いの始まりなのだよ！」

エミヤが話している最中も遠坂は下を俯きながら震え続けていた。

「すでに私は世界と契約した、あとはウヴェエ・・・グシャ！  
！」

素早い動きでエミヤの懐に入った小さな体は、赤白く輝く左の拳をエミヤの鳩尾を捉え深く抉りながら吹き飛ばし、天高く上がったエミヤの体は重力に従い急落下し地面に叩きつけられた。

「うるさいうるさいうるさい・・・聞いていれば勝手に自己完結しちゃって、あんたが進んできた道は周りの人を捨ててきたんだから後悔は許されないはずよ。どうしてもやり直すと言うなら今から鍛え直してあげる。」

腕を前に組みながら、ゆっくりと士郎のもとへ歩き始める。エミヤはよほど深く抉られたのか褐色の顔から流れ出る汗を拭き、何事もなかったように立ち上がるとしても膝が震えて立つことが出来ないうでいた。

まさに左を制するもの世界を制すであろうか・・・

「さすがに今のは効いたぞ遠坂、そのパンチこそ私の求めていた究極奥義ウニグ・レインーだ・・・っは！何だ今のはどう

やらあまりの痛みのせいか怪しげな電波を受け取ってしまったようだ、遠坂待て！待つんだ！そんなにこやかな笑顔で近づかないでくれ！」

エミヤはすでに自分の復讐など忘れ、必死に遠坂を諷めようかと魔術回路を起動する。思考に出て来るのはブルマを穿いた小悪魔の姉と竹刀を持ちこっちに手を振る陽気な姉「おい！」・・・忘れよう、きつと先ほどの拳のせいだろう。

そうか！アルトリア彼女ならと考えてみる・・・「シロウご飯はまですか？」

駄目だ・・・。

などと考える間に遠坂はエミヤの前に着いて何やら地面に紋様を描き始める、エミヤは虚ろな目で脳内戦闘中だ。

「リン、話は終わりましたか？」

「話してないけどいいでしょ持ってきてバゼット。OK、後はこれ書けば出来上がり！」

瓦礫から現れたバゼットは担いでいた170cmはありそうな、大きなアタックケースを地面に下ろし中に入っていた、モノをゆっくりと地面に置いた。

「リン、準備完了です。後は貴女次第です、決して何時ものうっかりはしないように」

「うるさいはね！始めるから黙っていてよ。」

ゆったりとした動作で地面の紋様の上に手を掲げると瞳を閉じ唱え始めた。

Anfang

セツト

It is a sheep according to the  
law of the world that does an  
d is pitiful.

世界の法に従いし哀れな羊よ

Becoming it soul it is possible  
e untying it now.

今解き放て哀れなる魂

The soul is led to the body.

魂は肉体へと導かれる

My Grammy is completed now.

今我の魔術が完成する

Revenge on the world.

世界への復讐

唱え終わるや否や眩いほどの光がバゼットの用意したケースからエ  
ミヤの体に向かってはしって行き、体につつすらと巻きついて見え  
る鎖を破壊していく。

「な！何をしているんだ遠坂、一体なんだねこの怪しげな光は？」

「あんたは黙って其処に座ってなさいすぐに終わるわ」

「ミスターエミヤ、ご冥福を祈ります。」

「待て！！何を祈るんだ、その前に君は一体誰だ。それに今にも私  
を食べそうなああの光は・・・くっ、投影開始」

出てくるは共に戦場を越えた相棒のはずだった・・・その手に出た  
ものを見るまでは、何故スプーンとフォークなのか！？目の前が暗  
く霞む中、昔の口癖が思い出される。



「なんでさ・・・」

エミヤの体が大きな光の繭に絡まれた中、遠坂は静かに繭を眺め続けていた。

バゼットはと言うとガスバーナーコンロを使い鍋に火を沸かしていた・・・右手にはカップラーメンが握られている。

約2時間が過ぎようとしている頃、辺りは薄暗くなり光も落ち着き始める。

バゼットと遠坂は、近くの瓦礫に腰掛コーヒーを飲んでいた。

「あとリミットは20分ちよつか・・・早く出てきなさいよ」

「・・・あと20分ですか、少し席を外します」

バゼットが離れていく背中を見ながら握っていたコップをきつく握り締めた。

7分程たつ頃微かに爆音が響き始め、遠坂は繭に向けて歩き始める。

## プロローグ（後書き）

いかがでしたでしょうか？

ゆっくりと更新していきますので御覧頂けると幸いです、今回ご覧して頂きありがとうございます。

お疲れ様です

（o ^ o）

## 新たな道（前書き）

誤字がありましたので変更致しました。

事件段階 実験段階

指摘して頂きありがとうございます（^ ^）ノ

今後とも皆様方よろしくお願いします！

## 新たな道

side ???

もふもふ・・・ふふふこれは完璧な毛布だ！

なぜか手が非常に小さくなっているような気がする、とにかく確認しておくか

解析開始

ミシ

リ

性別：女

年齢：0歳

身長：139cm、体重：34kg

身体年齢：14歳

身体能力：全体的にワンランクダウン

魔術回路、27本正常稼動に加え、全て遠き理想郷半稼動、

からの離脱による貯蔵量の増加

魔力量、最盛期のおよそ2倍（固有結界10分弱維持可能）

霊体化、受肉により不可

生まれたてはやはやだと！！これは何かの間違いかね、そうにちがいない性別まで変わるなどありえんからな。これは夢に違いない、頬を抓れば・・・痛いし柔らかいなくあはははっはっは。

いったん落ち着くか、身体能力の低下と魔力の増加戦略術の変更をする必要があるそうだ。とにかくこのもふもふしたものから脱出しようかね・・・

side 凜

眼の前まで来るとやわらかそうな繭の中から小さな手が飛び出してきた、少し小さすぎるような気がするけど問題ないでしょ。そうこの時の私はそう思っていた。

何だろうかこの小さな生き物はセイバーを小さくしてピンクのパジャマを着せたような小さな少女？

眼元は昔と変わらず鋭い鷹だが開いた瞳は透き通った青空のような瞳、小学生のような小ささだった・・・あは、やっちゃったかも！

「凜、これはどうなっているのだ。」

生意気にもこの小さな生き物は腕を組み見上げてくる・・・やるわね私の何かが目覚めそうだわ。

「違うわよこれは・・・そう、大成功よ！これであんたが追われることもないでしょ」

「ふっ・・・まあいいだろう、お礼だけは言っておこう。だがなぜ私の頬を突くのかね」

「えーっとこれは確認よ、あまりにふにふにして気持ちよさそうだから突きたくなったとかじゃないわよ」

明らかにうそ臭そうな凜から距離を置いてエミヤは体を動かし確認していく。

「リンあちらの清掃は終わりました、ミスターエミヤは・・・」

「ありがとうバゼットって何してるの？」

スーツに付いたほこりを払いながら帰って来たバゼットは変化したエミヤを見ると体から怪しげなオーラを放ちながら、エミヤを抱き上げてしまった。エミヤは怪しげなオーラに囲まれて身動きが取れないでいる。

「リンどこで拾ったか知りませんが私の報酬はこの子でいいのですで、失礼します」

「待ちなさい、あなたの抱えてる子がエミヤよ。だから持ち替えはゆるさないは」

「そんな・・・」

かなりシヨクだったのか、バゼットはその場で膝をつきうなだれ始めるが凜はやっとバゼットから脱したエミヤに向きなおり、表情を引き締めなおし懷から紙をとり読み上げていく。

「鍛錬の魔術師衛宮士郎、協会の命により貴方を拘束しに来ました。大人しく拘束されるなら手荒なことはしません、もし齒向かうなら実力行使させてもらいますと。まあ、今から飛んでもらうあなたには意味のないことでしょうね」

「やはり協会の使いとして来ていたんだな。しかし飛ぶとは？・・・遠坂まさか辿り着いたのか」

「いえまだ未完成よ、実験段階だから成功する確率も少ないわ。まさか、こんな形で試すとは思わなかった。」そう言う凜は足の付けね辺りに付いているナイフポケットから一つの豪華な短刀を握り、構え魔力を集中し始めた。

「さて遠坂！今確かに未完成と言わなかったかもう一度考え直すんだ。君の場合もしと言うつことが「士郎逝ってきなさい！」待て字が違う」

A n f a n g

T h e o n e t h a t r u l e s t h e i n n u m e r  
a b l e w o r l d a n d i s w o r t h

無数の世界を支配し足るもの

I a m t h o s e w h o o p e n a s f o r t h e  
d o o r .

我は扉を開きし者

I t . . t r u t h o f t h e w o r l d . . t o u c  
h e s .

世界の真理に触れあい

T h e t r u t h o f t h e w o r l d i s c h e a  
t e d .

世界の真理を欺くき

T h e d o o r i s o p e n e d n o w .

今扉を開き

R e c e i v e t h e f o r e i g n b o d y i n t h  
e w o r l d .

世界の異物を受け取れ

T h e w o r l d s p a c e m o v e m e n t

世界空間移動

凄まじい轟音と共に士郎のいたはずの場所は陥没し始め、中心部からはブラックホールが現れ紋様内の物をすべて吸い込んでいく。

凜とバゼットは耳を塞ぎながらその光景を見つめ今後のことを考えていた。

## 新たな道（後書き）

お疲れ様です

次回はちよつと遅め更新になりそうです、始めからこの調子かよ  
f  
^  
| ^  
;

よければ皆様のご意見お願いします。



## 非常識な新世界（前書き）

微妙な位置にコンマが着いていたのでやり直しました

## 非常識な新世界

真つ暗な空間の中を漂いながらエミヤは過去の出来事を思い出していた、その空間の中は時間の概念がないのか時間の経過すら感じる事が出来ない。

どれだけ経った頃だったか、急に体が吸い寄せられ体が明るい世界にほり出される。

ほり出された先は地上から数十mあろう上空、険しく壮大にある山々がよりいっそう清々しく感じる間違いなくぶつかれば跡形もなく散れるだろう。

「遠坂確かに素晴らしき山々だが、君は私に何か恨みがあつのかね・  
・・投影開始」

召喚したのは三叉戟、ポセイドンが地を撃って塩水の泉を湧かせた槍である

『泉を欲しだしたる矛』

槍の能力を生かしエミヤは地面にぶつかる直前に地面に突き刺す、突き刺された槍からは凄まじい勢いで水が飛び出しエミヤを地面の直前に空に打ち上げ、体を強化して危うげだが着地する事には成功した。

「我ながら滑稽な格好だが仕方があるまい」

着地すると周りに気配が無いの確認し、ぶつぶつと呟きながらびしょびしょになった服を脱ぎ投影した物干しにかけていく、念のため外套を投影して着ておくことにしたが。

それにしてもこの周りはかなり魔力が漂っている、聖地なのだろうかなど考えているエミヤだが次第に瞼が閉じて思考が回らなくなりはじめていた。

早速、肉体に精神が引つ張られているのかなど思いながらも外套に包まるように身体を丸め睡眠にはいつてしまった。

S i d e    ???

確かにこの辺で魔力を感じたのですが・・・もしかすると魔族かもしれないですね、全く烏巢さんの紹介の人達が来てから管理人をすることが大変です。途中で置いてきてしまったけれどあの人たちは大丈夫でしょうか？

ごつごつした岩の上をしばらく歩くと、次第にホンノリと明かりがみえてくる。

ゆっくりとした動作で近づくも周りには物干しに干された小さな服と、それを乾かすための焚火、赤い布に巻かれた少し魔力を出している荷物？

はて、持ち主はどちらに行っ たんでしょうか。

！？今あの布が動いたように見えましたね、念のため注意して調べてみましょうか。

S i d e    ???

むふふふ、待つてふわふわの饅頭私が食べてあげるから。

よく見たら動いてるような気がするが気にしない、いただきます！！

ゴスつと言つ音と共にくる痛みで眼が覚めるとそこには、鉄の棒らしきモノを構えながら殺気を向けてくる赤い髪の女性と、地面一面に鮮やかな赤の湖を作る上下GジャンGパンの青年がいた。

「美神さん何するんすか！俺はただこのチビンコに噛まれそうな美神さんの麗しき胸を守ろうとしただけなのに！！」

「あんたは何あほな事してるの！」

湖のように広がる血液の中から瞬時に回復した。青年は立ち上がり抗議するが、鉄の棒で憐れな程ボコボコに殴られ見てはいけないものになっていく。

遠坂お前はまだ優しくったんだなと、心の中で思うエミヤだがこのふたりの奥の部屋から流れてくる竜気にきずき対処方を弾き出していく。

「あら、お目覚めになりましたか？私はここの管理人、小竜姫です。何故あのような所にいたかは分かりませんが、しばらくの間ここで身柄を拘束させてもらいます。・・・何してるんですかあなたたちは。」

小竜姫とエミヤの調度左横辺りでは壮絶な戦い・・・いや暴力が続けられていた。

この出来事を見たことにより青年はただ者ではない、エミヤの中で青年のプロフィールに不死身と記される。

「はあはあはあ・・・何もやってないわよ」

美神はすぐさま鉄の棒らしきものを背中に隠すが、地面に広がる池は果てしなく広がり続けるのである。

大丈夫なのかこの量、とつくに人間の致死量は越えてると思うが？微かに同情するエミヤであった。

「管理人？まあいい・・・すまぬが小竜姫とやら、私を拘束するのはどういった見かね？そこの二人と違い私はただの一般人なのだ

がね」

エミヤの問いに対し小竜姫は腰の刀に手を当て眼を鋭く細め竜気を叩きつけるが、周囲にいた美神と青年は腰を抜かして座り込む中、エミヤ本人は素知らぬ顔で流し通す。

「竜気を受けて平然としておきながらそのようなことを言いますか、それに私は貴方が睡眠を取っている間微量ですが魔力を感じまいたが！」

小竜姫の言葉を聞いた瞬間、美神と青年は急いでこちらに構えなおる。

「ふむ、魔力が漏れていたのか仕方があるまい。確かに私は一般人ではないが君達が私に危害を加えん限りはこちらからも何もしないと約束しよう。」

エミヤは仕方がないとばかりに肩の力を抜き、お手上げ状態と手を挙げる。

「ちょっと、そっちで話が進んでるけどどうゆうことよ！」

自分達がのけ者にされているの気がついたか、美神が二人に向かってくっつくかか。

「すみません、あなた方は先に程の場所で修業の続けますので先に向かっています下さい。」

「うっ、わかったわよ。」

小竜姫とエミヤが向き合う中、美神と青年は小竜姫に言われた通りに扉を開け何処かに向かっていた。

しばらく睨みつけていた小竜姫だが、なにか諦めたのか力を抜きエミヤに背を向けながらエミヤに対し注意を促した。

貴女には少し此処で待っていてもらいます、くれぐれもへんな気を起こさないようにしてください。」

そう言う和小竜姫も何やら小さな式紙らしきものを残し、美神達の向かった扉の外へ向かった。

残された式紙とエミヤはお互いを見ながら苦笑いしとにかく此処がどこなのかを調べる必要があると、扉に手をかけるがまったくびくともしない扉に対して今度はため息をつく。

「貴女は此処から出ることは出来ませんのでご了承を」

小竜姫を手のひらサイズにしたような小さな式紙はふよふよとエミヤの頭の周りを泳ぐように回りながらエミヤに話しかける、実に頭の柔らかかそうな式紙だと思いつつもエミヤはもう一度部屋を見渡してみる。

まるで昔の中国の家を表したかのような構造だがまさに客室間をと呼ぶに相応しいだろう。

そういえば、目覚めた時から着せられているこの修行僧のようなこの服は非常に私の体にフィットして、動きやすい此処の普段着なのだろう・・・それにしてもこの式紙はなにをにこに私の頭の上でくつろいでるのだろう。一応私を見張っているのだろうが

「すごい綺麗な髪ですねーむふふ！」

実にのんびりした喋り方で鼻歌まで歌いだした式紙にエミヤは頭を痛める。

「君は私を見張っているのだろ？何故そんなにくつろいでいるんだね。」

「そうですよ！私はちゃんと貴女を見張っていますよ！」

ミニ小竜姫はどこからか団扇までだしくつろいでいる。

きつと突っ込んだら負けだと必死に耐えるエミヤだが、前の扉から現れた服を着た猿？を見てついになじみの言葉を言ってしまった。

「なんでさ・・・」

エミヤは此処に来て明らかに現実離れしている状況を無理やり飲み込み、目の前の猿に対して警戒心を強めた。すでに式紙は頭の上で気持ちよさそうに寝始めている・・・まったく役に立っていない式紙である。

「うき！」

「何をする、離さんか！」

猿はエミヤの手を掴み部屋の扉を開き別の部屋に入った。別の部屋に踏み込んだ時、違和感を感じながら前に行く猿について詳しく情報を得ようと猿を解読する・・・出てくるのは前の猿が通常の生物ではないと言っ非常識な事だけ、エミヤはため息と共に諦めを感じながら進んでいった。

## アーチャーVS齊天大聖

side ???

「また負けただと、なぜ勝てん・・・っは！私は一体何を」

俯いた形で固まったエミヤは今まで何をしていたのか、振り返って考えてみる。あの後、何故か猿に連れられやって来たのはテレビゲームの前。

ついついやってしまったが、この猿の鮮やかな手捌きには頭が下がる。私の次の動きが分かるかのごとく私のキャラクターを倒してしまっ、しかし下準備の時間は終わりだ・・・今では30%の勝率になっている。

違うぞ、そうじゃない私はどうしてしまただ！！落ち着いて考える、私は何故猿とゲームをたのしんでいるのだ。小竜姫とやらはどこに行ったのかね？

「これ落ち着きけ、お嬢さん集中が途切れると追いだされるぞ。」

「サ・サ・サ・サルが喋るだど！！う、なんだこれは・・・。」

焦ったエミヤの体がブレ猿の前から消え去った。

「ふう、わしとなかなかの勝負をするとはな。」

猿はコントローラーを構えたまま納得したのか一つ頷くと姿を消し、先ほどまで賑やかだったテレビは静かに沈黙するばかりだった。

side 小竜姫

美神さん達の練習を一時中断して老師が出てくるのを待つ、きっと



老師が先ほどの彼女の事を確かめてくださるだろう。・・・先ほどゲームに飢えていた事が気になるけど、さすがに齊天大聖老師も自重してくださるはず。小竜姫は淡い期待を抱きながら暗がりの部屋に入って行く、暫くすると老師が後に立ってバナナを食べていることにきがついた。

「老師様、彼女は如何でしたか！？やはり魔族でしょうか？」

「いや、素晴らしき見込みどころのある者じゃた。わしのあの技を避けおるとは！！このバナナはどこ産かの？」

問いかけられた老師は眼を輝かせて、豪語する・・・ここまで誉めるとは老師の技とはどのような技なのでしょう？

「そろそろ戻ってくるじやろ」

老師がおっしゃると同時に椅子にすわった少女が現れた。

「む！いったいこれはどうなっている・・・」

「小娘、準備運動はおわりじゃ！お前の魂はわしの精神エネルギーを大量にうけて加速状態にあったのだ。今からおぬしの能力を見させてもらう、小竜姫呼ぶまで小僧達の修業の続きを見ておれ。」

「わかりました、老師さま」

「やれやれ、此処の者は常識を知らんのかね。まあいいだろう、仕方あるまい」

言われるがまま猿のあとを着いて行く少女に小竜姫は不思議と二人が孫と祖父に見えた。

side ????

猿のあとを歩き着いたのは広大な平原だった。

「素晴らしい景色ではあるが、一体このような領地が何処にあったのだね。」

「なにわしが暇潰しに作り出した空間よ、気にするでない。では行くぞ小娘・・・！」

そういうと、先程までエミヤと同じ大きさであつた猿が突如として巨大化した。

「なんと馬鹿でかい、全く楽をさせて貰えないらしいな」

エミヤは口元を緩め微笑む、小さな身体からは朱い魔力が漏れだし身体に巻き付き次第に西洋の甲冑の様な形が出来あがり、少女は両手を斜め右になにかを持っているかのように構える。

「これはなかなかの魔力よの、わしはおぬしの事が余計に気にいったわい。では行くぞ！」

齊天大聖が出す鋭い突きを紙一重でかわしいくなくエミヤの中で情報を書き換えられていく。

世界の認証要素

記憶修正 真命：？？？

所持武器 剣・弓

戦闘スキル 幸運：B 対魔力：A 騎乗：B

身体能力の変化により精神に誤差発生、直ちに修正。

変更により戦術の情報を提供します。

なんだこれは？私の情報が書き直したと・・・よりにもよって彼女自身になってしまったというわけか、冗談もほどほどにして欲しいが？まあいい、今は目の前の化け物を倒すか。

彼女自身になろうとも、この身は剣如何なる者にも敗れる事はない！

目の前に迫る棍棒を剣で弾き、懐に入り剣を振るうが棍棒に弾かれ後方へと飛びくと前面に迫る拳を受け流し、拳を蹴り体を捻りながら後方へと降り立った。

瞬間の出来事であるが地面にはごっそりと決られた後が生々しく残っている。

「ご老体代よ、手加減と言うものを知らないのかね。普通ならとつくにあの世行きではないか。」

愚痴るエミヤに気にせず棍棒を構えて静かに待つ老猿にエミヤは武人を感じ。体を整え剣を構えなおす。

「やるの小娘・・・いや、小娘など失礼にあたるじやろつ。我名は斉天大聖なり。尋常に勝負を願う」

「名乗られても、名乗り上げるほど大した名前がないのだがね・・・アーチャーと名乗っておこつ」

エミヤいや、アーチャーは皮肉な言葉をしまい誇り高き王のように背筋を伸ばし名乗りをあげる。

side 斉天大聖

なるほど、アーチャーか・・・剣を構える弓兵とは言い当て変わっておるの。

二人の間に漂う空気がピリピリと音を発しているかと思うほど、脳が過敏になり音一つでも戦闘は始まるだろう。齊天大聖の頬を伝う滴が地面に落ちると共にアーチャーは剣を斜めにすらしながら真っ直ぐに向かつてくる、齊天大聖は地面に棍棒を叩きつけ地を揺らし棍を滑らす様に横に滑らす、アーチャーは待っていたとばかりに棍に飛び移り一気に駆け上がる。

齊天大聖は棍棒を捨て髪を千切り分身を作り、アーチャーを囲み一気に襲い掛かるが次々と切り捨てられ、数分もしない間に30匹近くいた分身は半分以下になってしまう。アーチャーが最後の1匹を手にかけてよとする瞬間を狙い、如意棒を斜め下から突き上げるが予期していたように剣を盾にして後ろに吹き飛びダメージを防ぐが剣を守っていた結界が吹き飛び刀身をあらわとなる。

「確かに貴殿は武神と呼ばれるに相応しい、次は私の全力を受けて貰おう。」

アーチャーは中段に構え、剣に魔力を送っていく。

齊天は自身の膝が笑い背筋を冷たい汗が垂れるのを感じ、自身の持つ力を全て防御することに集中する。

・・・そして、広大な空間は光りに包まれる。

Side 美神

「お疲れ様です、美神さん。少し休憩しましょうか。」

小竜姫の合図とともに倒れこむ自身の身体に葛をいれ、立ち上がるうとするが膝が震えて立ち上がる事ができない。

近くにいた横島はおきぬちゃんと元気に話しているのに情けない！

横島が何やら良からぬ事を思いついたのか、にこやかな笑みを浮かべながら近寄ってくる。

「美神さん、自称マッサージ師のわたくしめがアロママッサージじましようか！」

とにかくアロマオイルを片手に持ちトランクス一枚で飛び上がった変態を神通棍で撃墜し、動かぬ脚のかわりにおキ又ちゃんにタオルを持ってきてもらう。

S i d e 小竜姫

美神さん達の修業は順調に進んでますが、老師様は大丈夫でしょうか・・・心配で心配でじつとしていれませんか。

「美神さん、よければ温泉がありますのでそちらで汗を流しては如何ですか？」

「あらそうなの！是非入らしてもらおうわ」  
美神さんが喜んで立ち上がり、こちらにおキ又さんと歩いてくる。  
後の横島は瞬時に立ち上がり美神さんの後を着いてきているが、何かやるきなのか心配ですね。

S i d e 横島

温泉やと！これは神がわいにみろとのお告げや、げへへこの後は美神さんと小竜姫さまのヌードが見れるで。

「では、横島さん男性はそちらですので」

小竜姫の声と共に横島は男風呂の暖簾をくぐり、服を脱ぎ露天風呂のぞき見ポイントを探しはじめる。

横島がポイントを発見し待機していると、湯気が濃くて見えないが女風呂の方角から話し声が聞こえる。

もう少しだ、もう少しでこの眼の前に理想郷が。眼を精一杯開いたがギャグ担当の彼を世界は見捨てなかった、強烈な爆発音と衝撃により地獄に引きずり落とすことになる。

衝撃で木の上から落ちた横島は露天風呂に真っ逆さま入水し、水音を聞き付けた美神により拷問されることになる。

S i d e 小竜姫

美神を連れて温泉に来た小竜姫は老師のご飯を何にするか考えていた。

おキヌと美神は横で横島について話している、何やらビルの3階を覗くために登

り地面に落ちても何食わぬ顔で復活を果たすなど、彼はかなり特殊らしいと頭の隅に聞き入れ温泉に入ろうとした。

ドツガアアアン！！・・・うわああゝ、ザッブーン！

「横島（横島さん）！！」

「美神さん！！違うんですよ、水漏れ直そうとして」だまらっしい」

後ろで悲惨な音が鳴り響く中、小竜姫は音の発信元へと急ぎ走っていく。老師の演習場の場所に近づくにつれて、あちらこちらに生々しい程の傷が広がっていき天井部もひびが入っている。

「斉天大聖老師さま！！・・・これは一体！？」

小竜姫は啞然と立ち尽くし、老師の周りの光景を見て絶句してしま  
う。

演習場の真ん中では左腕を失い立ち尽くす老師が立っており、周り  
は荒野のように荒れ果ている。

「小竜姫よ、あの者は人であり人でない存在だ。丁重にもてなして  
やるんじゃ、わしは暫らく天界に戻って傷を癒してくる。」

齊天大聖はそう言い残して姿を消した、残された小竜姫は荒野の始  
まりの場所に倒れ伏してる少女を見つめ・・・頭を悩ますことにな  
る。

一体この少女は何者だったのですか？

## エミヤ達の会議（前書き）

遊び心で書いたものです、あまり本編と関係ありません・・・



## エミヤ達の会議

エミヤシロウが最終的に到った剣の丘、そう何人ものエミヤシロウが・

『おい！そっち0・5？もズレてるぞ』

『何を言う、貴様こそ0・6？左にズレてるではないか』

『まあまあ、落ち着け。多少のズレはかまわんだろ』

『貴様は黙っている』

そこに穏やかな空間は存在せず。

『だから、そこにグギを撃ち込めばぶざまになるいったではないか！』

『馬鹿者が、貴様に何がわかるここに打つと映える芸術がわからないのか！』

そこに誤りは存在せず。

『そちらの剣が邪魔だな、破壊できるか？』

『ふむ、任せてくれ。ふん！』

ここにひとつまた幻想級の模作が破壊される。

街が出来上がりつつある丘には剣も存在できなかった。

・  
・  
・

エミヤ国会議事堂

『皆、席に着いたか』

エミヤシロウ達によって作られた壮大な会議室・・・まるでギリシヤの神殿のようだ。

『では、今からエミヤシロウ達によるエミヤシロウの為のエミヤシロウ会をひらく。なお、私の趣味で机は円卓だ！』

自らの趣味で円卓を創りだしたエミヤだが周りのエミヤシロウ達

はそれどころではなかった。

『やはり会議室なら紅茶より茶方がいいか、いやしかし・・・』  
凜、私は次こそはやり遂げてみせるぞ』 『イリヤ今何してるだろう  
か、風邪などひいていなければいいが』 『・・・』 『アルトリアの  
次の食事はつと・・・』 『うほ！いい男』

全く聞いていない、一人妖しい奴がいたが気にしないとはかりに中指でかけていた眼鏡を押し上げる。

「フ・・・これはまさしくエミヤシロウに相応しい話し合いだ、混沌こそ我々の始まりだ！！」

司会役のエミヤもブツブツと喋り始め、止まることのないループが続く・・・

### 3日後 エミヤ国会議事堂

「諸君！！まず落ち着きたまえ由々しき事態だ。」

我に返るエミヤ達は背筋を伸ばし席に着く、鷹を思わせる瞳で司会を務めるエミヤを見つめている。

「我々の同士にしてエミヤシロウが赤い悪魔のうっかりで大変な苦行に向かわされているようだ、しかも！！性別も変化させられている・・・あまりにも不憫だが我々でしてやれることは限られている。まずはこの写真を見てくれ」

議会の壁に映し出されたのはアルトリアを紅色に染めた写真だった。

「この写真が今回の被害者エミヤAだ」

写真を見たエミヤ達は口々に悲鳴やら歓喜をあげ叫びあふ。

「被害者は遠坂凜の魔術により世界からの束縛を回避することは出来たが、いつものうっかりで性別の変更と並行世界に飛ばされてしまったようだ。」

「凜!」「素晴らしいぞ遠坂!」「なんてことだ」「ククク・溺れたか衛宮士郎」「頼みはしたがこれは酷い・・・」「なんでさー」  
口々に叫ぶエミヤ達の声をテーブルの叩く音で黙らせる司会エミヤ  
「今回の被害者であるエミヤシロウにはこの剣の丘BOOKをイン  
ストールしてやろうと思うのだが皆の意見はどうだ?」  
司会エミヤの声に満開一致のエミヤ議会であつた・・・

## やっちまっ たよ竜神様へ前編

齊天大聖とアーチャーとの腕試しが終わり、気絶する彼女を抱えて寢室に寝かし美神達のもとへ戻った小竜姫は着替え終わった彼女たちと合流して訓練を再開した。

「お待たせしました、では第二試合を開始しましょうか。」

待つてましたとばかりに法円に入った美神から背丈2倍近くある女戦士の影法師シャドウが現れ戦闘態勢に入った。

「禍刀羅守出ませい！！」

小竜姫の一声と共にまるで機械で創った蜘蛛の模型に鬼の頭だけをつけたと言われないばかりの全身黒の痛い召喚獣が地面から浮き出してくる。

「悪趣味ね・・・」「な・・・なんか痛そうなデザインっすね」美神と横島は呆れながらも呟くが酷い言いようである。

『ゲケケケケッケーー！！』けたたましい叫び音と共に先ほど召喚された禍刀羅守は美神の影法師に襲いかかるが、美神は即座に後ろに飛び退き胸元の斜めの斬り傷だけで躲しきった。

「あー！！きつたねー！！いきなり攻撃しやがった！！」「禍刀羅守！！私はまだ開始の合図をしてませんよっ！まったく私の言うことを聞かないとはわかってるんですか」

文句を言う横島と注意する小竜姫だが禍刀羅守は小竜姫に向かって手であっち行けとばかりに動かしている、小竜姫の額に青い筋が一瞬浮かび上がったのを見て横島が隣で悲鳴を上げかけていたがそんなことは今は気にしない。

「っこのくされ妖怪！！よくもやっ たわね、この代償高くつくから

ね！！」

口論の末に禍刀羅守と小竜姫が今にも一発即発になるかならないかと思われるときに、美神が最初のダメージから気を取り直し禍刀羅守に向かつて影法師を向かわせ武器である薙刀を勢い良く振り落すが、禍刀羅守は自身の鎌のような前足で滑らし反対の前足で背中に鋭く突き立てようと振り下ろすが、美神の影法師は体を捻り何とか脇腹をかする程度で避けきった。

今の戦闘で影法師の本体である美神は息遣いが少し荒くなっているのを確認した小竜姫は少し考えたあとに横島に近づいて行った。

「仕方ありません、特例として助太刀を許可します。あなたの影法師を抜き出します。」「ちょ、ちょっとまって下さい、心の準備が！！」

問答無用とばかりに何かを言う横島の頭を掴み影法師を無理やり引っ張り出す、風とともに何かが形成されていき・・・「いつよ！こんにちは！またまっ！今日はいいお天気日和でげすなっ！」

はじけた口調の40センチ程の太鼓持ちの格好をした影法師が召喚された。

「こ・・・こんな情けない影法師は初めて見ました。」

まさかと口元を引きつらせながら答える小竜姫に横島はその場で俯き「俺は平凡なバイト学生なんやしかたがないやんけ！！ここに来る他のやつと一緒にしんといてくれ！！」愚痴りながら地面にの字を書き始める。

『姐さんこの男を買いかぶり過ぎでっせ。このとーり力もありまへんし使いもんになりまへんで！！』と蹲る横島の頭を持っていた扇子でペチペチと叩いている。

横島の横でおキ又ちゃんが慰めているが影法師のせいで、よけいに哀れな光景に見えてしまうのはやはり彼の持つ雰囲気がそうさせているのだろつ。

「くっ！」

横島たちが話【漫才】している後ろでは美神が疲れにより動きが鈍り始めてしまい、少しずつ禍刀羅守の攻撃が掠り始める。

「横島さんこのままじゃ美神さんが！」

おキ又ちゃんの焦る声を聞き横島は素早く自らの影法師を操りながら美神の近くに走り寄った。

「大丈夫っすか、美神さん！」

「なめるんじゃないわよ！私は美神令子なのよ！！」

先程までの情けない態度はなく、禍刀羅守を眺める横島に驚きながらも強気の口調で言い切り息を整え禍刀羅守に向かってもう一度構え直す。

後ろで眺める小竜姫は横島の変貌を見ながら顎に手を当て横島の事を考える、その横のおキ又ちゃんはおろおろとして眺めている。

「横島くん、少し耳貸してくれる？」

「えっ！まさか、ここでぶっちゅつと最後のキスですか！！どうぞこの横島ヴぁあゝ」

美神の左斜め下から繰り出された拳は横島の頬に教本の通りに決まり、回転しながら横島は空中を舞う・・・ぐっやち・どす・・・あまりの光景に禍刀羅守まで止まってしまう。

一番早く復帰したおキ又ちゃんは何処から取り出したか木の棒でつんつんと横島だった物をつつき確認するがピクリとも動かない。

さすがに落下音がひどい気がするが、この場に横島を心配してくれる者はこめかみを引きつらせる小竜姫と禍刀羅守しかない。

「横島くん巫山戯てないで早くいらっしやい。」美神の一声で今ま

で赤い水たまりを作り出した横島は、がばりと起き上がり何事もなかったかのように美神の前でヘコヘコと頭を下げている。

「まったくアンタって子っは！ハア……小竜姫様タイムね。とにかくいらっしやい」片腕をあげ小竜姫にタイムを宣言した美神はため息をつきながら横島の耳を引っ張って歩いて行く。

タイムを唱えられた小竜姫は呆れながら禍刀羅守を見つめるが、先ほど勝手に動きだした禍刀羅守も先ほどのモザイク画を見てしまっていて腰が若干引けているため飛び込んで行こうとはしてはいない。タイムを取った美神達というところ陰に潜み3人ともしゃがみ込み、ぼそぼそと喋っているが、美神に握られる横島の腕はコレでもかと言っぐらい絞めつけられている……。逃げないためだろうか。

「いい横島くん、アンタがあいつの視界を奪ってる間に私は後ろから近づいていつて斬りかかるから……。失敗するんじゃないわよ」横島は近づくと美神の顔を前に恐ろしい程の汗を流し頭を立てに振る。ちよっぴり腕に胸が当たってドキドキしてるのは横島だけの秘密だが。

「よし！行くわよ横島くん、作戦通りにするのよ」美神のは気合を入れて立ち上がり小竜姫に準備万端よと言ってから舞台に立つが横島は「わいは死ぬんじゃないやろか……。」など呟きながらどんよりとした格好で影法師と一緒に舞台上に登っていく、まさにこれから階段を登っていく死刑囚の如く顔でブツブツとつぶやいている姿はあまりに儚かったとか。

「え、え〜とでは再開しますね。双方構えて、始め！」

作戦会議中ご丁寧に待っていた禍刀羅守は美神の影法師に不規則な動きで襲いかかるが、今にも斬りつけようとした途端美神が横島の影法師を禍刀羅守に向かって投げつけ見事に顔に小さな太鼓持ちの影法師ががっしりとくっつき視界を奪い取った。

「どんなもんじゃい！関西人舐めとつたらアカンぞ」叫びを上げる横島だが横島自身鼻水やら涙でひどい事になっている、視界を隠されて閉まった禍刀羅守は顔に付いた横島の影法師を剥がそうとするが手が鎌状になっているためどうも上手く取れずにいる、その隙に美神の影法師は上手く背後に回りこみ薙刀で真つ二つに切り裂くことに成功する・・・あと数センチ切っていたら横島の影法師も真つ二つだったであろう。

「お疲れ様です、見事禍刀羅守まで倒してしまうとは私も少々貴方達を侮っていたようです。次は私が御相手しましょう。」そう言つて舞台上に上がろうとする小竜姫に美神が条件を突き立てた「ちよつと、小竜姫様さすがに貴女が相手は分が悪いわよ。せめてさっきの時と同じように助つ人を使つていいかしら」なにやら含む所がありそうな美神に気になりながらも小竜姫は構いませんの一声で了解を出してしまったのは彼女の偏見のためであろう。

美神と言う女は汚い手は天下一品なのを知らなかった、いな気づけなかった彼女のミスだろう。

美神は横島とおキ又ちゃんを呼びこそそと喋り始める、一方小竜姫はつけていた装備を外し身軽な格好にする。

「よっしゃー！やってやろうじゃないか。ハア、ハア」ちよつと危なげな動きをする横島の手つきとその血走った眼はヤク中じゃないかと思われる、さすがに他のメンバーは引きつった顔で舞台上にたっている。

「あの・・・そちらの方は大丈夫ですか、何故か凄い気合がお入りのようですけど・・・」

ちよつとあれの相手は嫌だなと思つてしまった小竜姫がいても仕方



がないが美神は同情の眼差しで大丈夫よの一言で片付け戦闘態勢で待機する。

小竜姫も諦めて構えを取ると、体から龍氣を出し美神と同じ影法師の背丈まで巨大化し開始の合図をして休めの状態をとる。

ただ佇むのその小竜姫の姿は一見無防備に見えるが無言の重圧が体にかかる、美神の背筋に一滴流れ落ちる汗と脳内で繰り返されるシユミレーションは敗北の気配しか漂わせない。

試しに近くに居た横島 影 を投げつけるが軽々と躲され地面に叩きつけられてしまった。

（これはさすがにピンチね、切り札の一つは投げちゃったしたぶん生きてるわよね）隣でぴゅりゅぴゅりゅと頭から血を流している横島を無視して先ほどの一連の速さに舌を巻いた、流れるような体さばきにあの叩きつけた時の威力・・・何故横島が生きているかわからないほどだ。

一方小竜姫も内心焦っていた（まさかあそこで味方を投げつけてくるなんて恐ろしい人ですね、そのやり方はまさに魔族のようなやりかたです。それにしても先ほど投げられた影法師は何故微笑んで飛んできたのでしょうか？まさか先ほどみたいにしがみついてくる気だったのでしょうか！？）

びゅるびゅると血溜に横たわる横島は奇跡的に生きていた、いや靈力はバンバンと上がってきているが。影法師が小竜姫様の後ろ姿に見える位置から少しづつゾンビのように這いずりながら足元に近づいている。あと少しで届きそうだが小竜姫にバレずにココまでいけるこいつたちは半端じゃない。

「挑んでこないのですか？ならばこちらから行きます。」

小竜姫の言葉と共に目の前に現れる刀を何とか薙刀で流すがあまり

の威力の強さに後ろに後退してしまうが、小竜姫の攻めはドンドンと勢いを増していく。

美神の影法師が守りに入っただのを見た小竜姫は体のリミッタを外し超加速状態に入り足払いを仕掛ける、当然ながら美神の影法師は足元にきた突如の攻撃を避けることも出来ずに背中を強打して薙刀を落とすが素早く背後に飛び退き距離をはかる。

「何よ今の！あんなの防げるわけじゃない・・・」

あまりの出来事に啞然として前方に落としてしまった薙刀の回収方法を探す、小竜姫は一時超加速状態を解き体にかかった負担を和らげると一気に美神の影武者に詰め寄り今にも斬りかからんとするが、その時後ろからがっしりとしがみついてきた先ほどまで地面に伏していた横島 影 が抱きつき小竜姫の胸を揉みしだく、すると突如と小竜姫のサイズがどんどんと縮こまりもとの小竜姫に戻ってしまう。

「背中からいきなりむ、むむねを触るとは何事ですか！！」「ああ、やらかいわゝこの中も入ったるで。」

小竜姫が後ろについた影法師を引き剥がそうとするがどんどんと首元からすっぽり入ってしまった影法師は下の方へと降りていき、外で叫んです小竜姫を無視して背骨の辺りの鱗を見つけ触ってしまう。触る瞬間に小竜姫のダメとの言葉があったが間に合わず、小竜姫の体から光が発しられみるみるうちに龍神の姿になり舞台に火炎を吐きだし天に向かって吼えかかりすぐに視線を美神たちの方へと向けて火炎を吐きながら迫ってきた。

「ちょっとあんななんてことするのよ！あれ何とかしなさい！！」「あんなん知りませんやん、俺何もしてませんって！！」「そんなことより、なんとか怒りを鎮めないと・・・！！」「美神と横島が小竜姫の吐く火炎を避けながら言い合っていると後から逃げてきたおキ又ちゃんに止められてふたりとも小竜姫の方へ向き直るが『あれ

は説得の通じる状態じゃないだろう・・・』と練習場を破壊しまわり絶好調の龍神様 小竜姫 をみて急いで出口を探す但舞台が壊れたため影法師も消えさってしまい生身の体のみで歪みの空間を探すはめに・・・。

side アーチャー

「ここは・・・」

目が覚めると見覚えのないベッドの上で頭に何やら吸盤らしきものを付けられ縛られていました、てへ・・・ではないわ！！

なにやら気を失っている間に怪しげな装置から伸びる吸盤が頭にペツチヨリとくつついているがその怪しげな機械からすると脳波でも見ているのだろうか？

扉の開く音共に一人に女性が入ってくる「目が覚めたのね、そんな怪しいモノじゃないから心配しなくていいのね」

何処をどう見れば怪しくないかわからないが全身タイツのような服を着た女性は近くのテーブル台にポットを置きカップに飲み物を満たしていく、さてはて何を聞きうべきか。

「失礼だが少々質問させてもらって構わないだろうか？」アーチャーの言葉に女性は「いいのね」とまったりとした口調で2つ置いたうちの片方のカップを取りベット近くのいすに座りながら中の飲み物を冷ましながらちびちびと飲んでいく。

「そうだなここはどこでこの機械は何かね」場所と自身の頭に付いているこの怪しげな機械をさしながら質問するアーチャーに女性はにこやかにここは妙神山の客の間なのねといい、その後機械の前に立ち自慢げに胸を張りながら「これは私が開発した人体解析装置なのね」などとまるで幼い子供のような無邪気さで紹介し始める・・・

彼女はちよつと大丈夫なのかと心配するほどだ「失礼なのね！私  
は大丈夫なのね！」おつと思考を読むとは驚くところだが、まさ  
かモノノ怪のたぐいか？「それでも神様なのね！ヒヤクメ様なのね  
」なんとまあ、この世界には神様がうようよといるみたいだ先ほ  
どの猿といい困ったものだ。

アーチャーがヒヤクメにこの世界の状態を聴きだし終えようとした  
頃、凄まじい地響きと共にもくもくと立ち上がる煙に二人は言葉を  
失った・・・『何が起こった（のね）』

二人は急ぎ煙のする方に走るが向かう先は風呂場に暖簾のような奥  
にある扉から発生していた。

やっちまっ たよ竜神様へ中編1 (前書き)

短いです・・・

## やつちまつたよ竜神様へ中編1

煙を上げながらガタガタと震える扉をエミヤとヒヤクメは啞然とした姿で眺めていた。

見事に扉付近の壁はひびが入り今にも崩れださんと言わんばかりにポロポロと塗装が剥げていく、生唾をひとつのみ震える膝に喝を入れて取っ手に手をつけるが、後ろからヒヤクメの肌白い手によって止められる・・・

彼女は首を横に振り微笑むが明らかに目元が引き攣っている、私自身もヒヤクメに首を振り返り返して腕に力を入れて一気に扉を「ありました美神さんここですよ！！」聞いたことのある声と共に勢い良く開かれる扉に顔を強打した私はあまりの痛さに口から出る言葉と共に床をゴロゴロと転がり続けた。

「ありました美神さんですよ！！」横島は広大な広さを誇る演習場の出入口を見つけ勢い良く扉を開け放つと、そこには「うがああ」と奇妙な声を上げながら地面を転がる少女とその少し後ろで目を回した女性が倒れていた・・・ナニコレハ？

一瞬止まった横島を龍神の叫び（小竜姫）を聞き我に帰った、後ろから走ってくる美神とおキヌちゃんを先に行かせて少女と女性を担ぎ上げ後を追いかける横島。

横島が走りだした瞬間に後ろの扉が吹き飛び中から龍神が炎を吐きながら周りを焼き尽くしていく、建物の彼方此方に火がつき机の上の花瓶が落ち吊るされているライトも地面に落ちて碎け散っている。門前の広間に出る頃、横島の腕の中ではたと涙目になりながらも暴れは始めたアーチャーは何とか横島の腕の中から抜け出し彼の腕からヒヤクメを奪い取り頭を右手で摩りながら横島の隣を走る。

二人が門に到着しようとした時に突如と横を走っていた横島が目線から消える、門の外にでて後ろを振り返ったアーチャーの眼の前に写ったのは器用にバナナを踏み頭から床に倒れこんだ横島の哀れな姿だった。

燃える屋敷をついに屋根を突き破り出てきた、小竜姫を見た美神たちは門の鬼門達に門を閉じるように促しあわれに横島は門内で閉じ込められるハメになった・・・

門内ものの横島はと言うと「ちょっと！美神さん出してくださいよ、あれは死んでまいますって！！」扉を一生懸命に叩いていたりする。扉を叩く音が聞こえて数秒後、中から横島の悲鳴が辺りを響き渡らせた。

横島自身は龍神の吐き出す火炎を紙一重で避けて何とか門を開ける方法を探し、時々自らの手で龍神の体をペシペシと殴っているが全くもって効いていなかったりする。

（くっそたれがー、このまま死んだら死んでも死にきれんちゅうに。こう何かドカンと吹き飛ばせそうなもん無いんか！）横島の力が徐々に手のひらに集まり始めているが本人はまったくもって気づいていない、今も飛び火がジーパンの一部に飛び移り走り回っている。徐々に横島自身により位置が先ほど離れた門へと近づき遂に門に追いつまれる、「は！？いつの間にか追い込まれるやないか、ワイの馬鹿。嫌やー！死んでまう、誰か開けてくれー！」血走った目でバンバンと手のひらを扉に叩きつけていた横島の手から何やら一つの球が転げ落ち、一瞬の光と共に大きな音を立て開きさられた門が横島の体を外へとほり出したが頭上を龍神が凄まじい速度で過ぎゆき、門の外の一団は顔から血の気が引いていくのを感じていた。





やっちまっ たよ竜神様へ中編2 (前書き)

続き (・・)

## やっちまったよ竜神様へ中編2

長野県ピー市のとある山の中

夕暮れがかかる山々の道を男たち30人程のバイク乗りたちが最後の唸りをあげて走っていた。

先頭を走る真つ赤なバイクはフロントからバックまで改造されており、ボディに刻まれている兎の愛らしさがなければまさに男たちの憧れの車体になっていおただろう。

日が暮れかかる頃、遂に男たちの最後の旅は終わり小さな池のほとりの開ききった広場に集まった。

この場所は男たちにとって特別な場所であり、最後を飾るのには絶好の場所である。

先頭を走っていた男は、またがっていたバイクから降り後ろを振り返る。

一人ひとり自分自身の後を必死に付いて来てくれた若者たちの顔である、ひとつひとつの思い出が今にも思い出しそうになりながら、口にたまった唾を飲み込み足を前に踏み出す。

男が降りるのが合図のように周りの者もエンジンを切りライトを男の方へ向けて姿勢を正していく。

男の身長は決して高くないが、辺りを包み込むような暖かさと勇敢さがあることはこの者たちなら皆知っている。

この集まりも所詮は何処にも属せずにあぶれてしまった若者たちの集まりである、誰にも必要とされず何をするかも分からなくなつた少年達をしっかりと前を向いて生きていくように男が導いてきた実績の結晶である。

辺りが静まり返り男はもう一度周りを見渡す、じつとりと手のひらが熱くなり閉ざされた口が重々しく開いた。

「皆、最後のイベントに参加してくれて有難う！今日をもって俺は

このうさぎん族から抜ける事となった、後任はこっちの柏木がやるから心配するなや。今日まで俺の後を付いて来てくれて本当に有難う・・・」

うさぎん族の名前は不評であつたがこの族はまさにもう一つの家族であつた、集まっているものの中にはすすり泣く奴やら、号泣してしゃがみ込む奴などたくさんいたが男エイキチは眉間にシワを寄せ目頭から流れる雫を上を向くことでごまかす。

「オトン！」上を向くエイキチに一番可愛がつていた健が呼びかける、体にぶつかる衝撃と共に鮮やかな真つ赤なバラの束が腕いっぱいエイキチの胸に叩きつけられた。

「これは皆の気持ちやから、この族皆でしっかりまとめてみるから顔を情けなく歪ませながら不器用に笑を浮かべて花を袖で拭い上げる。」

エイキチは健の頭をその少しうす汚い手でこねくり回し、ありがとうありがとうと花で顔を隠しながら涙を流した。

今年で就職のためにエイキチにとってこの自分の息子達を捨てることになるのは究極の選択だった、しかし息子達は自分の思っていた以上に成長して大きくなっていたことに感激していた。

しかし、ここは非常識な世界そんなに世の中あまくなと鼻で笑うかのように周り一体を龍氣が覆い尽くした。

「おい！あれを見るよこっち向かってくるぞ。」ざわざわと周りが騒がしくなってくるのを感じエイキチが顔を上げると、隣の山から龍の形をしたなにかがこちらに向かって火を吐きながら向かってきたのである。

驚くうさぎん族達はエイキチを守ろうと前に出るがエイキチは早く逃げるように促す、しかし誰も聞こうとせず動きもしない。

目の前に炎が迫ろうとした時に奇跡は起きた、目の前には一匹の狐が飛び出し龍と向かい合うかのように立ちふさがったのである。あまりの可愛さにきゅん！ときたエイキチだが、すぐさま考えなおし狐を抱えて皆に散会するように怒鳴りつけた。

怒鳴りつけられた、者たちはバラバラになり一気にバイクに飛び乗りかけていく。

辺りが火の海になりながらもかけるその姿は仮面ライダー？のようだったという、エイキチの腕の中でもがく狐が光を発し始めたのはその直後だった。

狐は着物を着た美少女となり啞然としたエイキチを突き飛ばし、美少女は龍の元へと駆けていった。

少女は起こっていたそれはもう頭から煙が煙が出るくらいに、殺生石から起きた少女をまず待っていたのは火の海であり大事なしっぱを少し焦がす程の火の海であった。

少女は空を飛ぶ龍が原因とわかるや龍の顔面に一発をかますために走り、今にも燃やされそうな人間を一応守り今から蹴りをかましてやろうとしていた所を抱え込まれ走られたのだ。

結構なタイムを食らってしまった、余計にいらついているのだ。

何とか龍の見える場所まで来てキツイのを一発かまそうとしたところ、後ろから声をかけられた。

「君は一体何をしようとしてるのかね」と・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9116m/>

---

エミヤ i n G S

2011年9月9日17時10分発行